論文

幻灯が明治の人に見せたもの――英米からの視点――

岩田託子

あんまり人をばかにするな。その話自体がおもしろければ絵なんかなくても、スライドがなくてもおもしろい。日高敏隆『ぼくにとっての学校』鷲田清一「折々のことば」『朝日新聞』二〇二一・七・三一。

はじめに

明治日本に始まった幻灯文化をヴィクトリア朝後期に最盛期を迎えた英国の幻灯文化から見ると、欧米から伝播した幻灯は取捨選択されて日本独自に発展したと考えられる。盛んであった「教育幻燈会」はその好例である。

英国においても、いわゆる理科・社会科の教材となるような種板とともに、教育・啓蒙目的の種板は多種多様膨大である。特に、教会や日曜学校で用いる宗教教育用と、大きな社会運動であった禁酒集会用の種板は広範囲に普及していたことが、カタログや残存する種板から明らかである。ただ日本においては、キリスト教教育・禁酒運動関連は主流として普及するものではなかった。

では、日本で流行した「教育幻燈会」は、何を見せて教育したのか。明治日本の「教育幻燈会」がどのように構想されたかを、見せたソフトウェア＝種板から再構成を試み、日本の幻灯文化の独自性を探りたい。

明治日本が推進する近代化において、教育はかなめであった。教育推進のために欧米から導入された教育用品の一つが幻灯である。一では幻灯の主に英米からの伝来・伝播を文献と現物調査から概観する。二では、教育目的に用いられる幻灯、英語で云う"lantern lecture"幻灯講義に相応する邦文文献を挙げ吟味する。

各地で開催されるようになった「教育幻燈会」により、日本において教育目的の幻灯が場を得たとは云い難い。この場合の「教育」

が意味するところは、幻灯講義"lantern lecture"とは異なっている。「教育幻燈会」に対応する英語はない。

明治における欧米由来の幻灯文化を理解するためには、石井研堂の著作と取り組まねばならないが、批判的に読み直してみたい。幻灯導入については『明治事物起原』[1]を典拠にするのが定番である。読み物シリーズ『理科十二ケ月』[2]でも第十一月は『幻燈會』である。科学装置全般に興味を持った石井研堂であるが、幻灯に非常に惹かれた文筆家でもあり、その筆力で普及に一役買っていた。このことを、石井研堂が幻灯を「新式」と「教育」に二分したことに倣い、三・四で分けて考察する。

教育目的の幻灯は導入以来、日本のスクリーン・プラクティスの大きな分野になった。それだけに、「教育幻燈」の可能性を確認することを五において目論んでいる。六では、その例として大佛次郎「幻燈」から在り方を考察したい。

凡例

・引用における旧漢字・新漢字は原典どおりとした。例えば「幻燈」「灯灯」や「福澤」「福沢」などが混在するのは、この理由による。
・年号については、西暦年・和暦を必要に応じて相互に補うように併記に努めた。
・【図】、別表一、二は本編末掲載。

一〈明治における幻燈の伝来・伝播〉

日本への幻灯輸入は大きくは二度あった。一度目はキルヒャーによる幻灯発明後のオランダからで、鎖国にあってもオランダに門戸を開いていた長崎から伝わったとされる。その後、江戸時代を通じて、東では「写し絵」、西では「錦影絵」として、日本独特の幻灯芸能文化が発展を遂げた。二一世紀においても、東のみんわ座と西の池田組は、復活・継承しながら現代の芸術として国内外で上演し、高く評価されている。「写し絵」も「錦影絵」もコンテンツはもっぱら娯楽である。教育的意図は感じられない。

明治の幻灯導入は、滞在先の米国あるいは英国から手島精一（一八四九―一九一八）が日本に持ち帰った、とする石井研堂『明治事物起原』での記述が通説となった。たしかに手島は岩倉使節団に通訳として同行するほどで、帰国してからは工業教育に精魂傾け、また文部官僚として働きがあった。教育目的の幻灯輸入が手島から始まったとされるゆえんである。その年代については異論もある。教育博物館館長を務め（一八七七―一八八八、明治十―二一年）、「文部省から年々1万円の多額の予算が支給されたので、手島はしばしば欧米の博覧会に出席し、そこで最新の教育品を購入した」[3]ことから、石井研堂説より時期は遅くなるが[4]、幻灯機・種板も教育博物館館長時代に持ち帰られたとも考えられる。

幻灯機とともに手島が持ち帰ったと研堂が記す種板「天文十七枚、自然現象十二枚、人身解剖二十枚、動物二十一枚」は、現物の

所在が定かでないだけに吟味が必要である。

同じカテゴリーと枚数が、幻灯業者によるカタログに後にも残る。ここから石井研堂説の肯定もできそうだ。とはいえ、明治初期に上映された幻灯の記録から異同を確認すると、種板については、石井研堂が手島由来としたもの以外の伝来も想定できる。

手島精一が持ち帰ったとされる幻灯機と種板はオリジナルな宝物ではなく、複製が奨励され、教育・啓蒙の役割を広く日本で果たす使命を帯びた。その結果、類似品を扱う幻灯業者が複数成り立っていた。例えば都楽カタログ[5]（一八九五、明治二八年）巻末広告【図１】に紹介される「教育映画之部」（映画は投影されるもの、この場合種板の意）には、カテゴリーと枚数が石井研堂のいう手島由来種板と一致する例が挙がる。「天文學の部運轉付」（ハンドルで回転させる様式）一七枚、「天變地異自然現象」一二枚、「人身生理解剖之圖」二〇枚、「動物學之部」二一枚と、手島が持ち帰ったものを意図をくんで「模倣」しつづけたのかもしれない。

教育博物館での幻灯種板の展示分類も貴重な情報である。手島が準備に尽力し館長を務めた教育博物館では、第一室第十一函に幻灯機自体の説明がある。また種板の意味で「映畫」という語を用いている。種板の展示場所は、館内室ごとのテーマ展示に即して、分けられている。幻灯機というハードウェアに対するソフトウェアを例示するために種板をまとめて第一室に展示する、という方針ではなく、種板はそれが表すものに従い次のように場所を与えられたのだ。

> 映畫ハ欧州各國の教舍等あり其外星學第四室にあり生理学第六室中の比較解剖模型の傍にあり地質及ひ自然の現象第八室中の地質學模型類の傍にあり動物類第十三室にあり[6]（傍線は執筆者）

各々の枚数は記述されていないが、「星學、生理学、地質及ひ自然の現象、動物類」という分類は、手島由来とする石井の分類記述「天文、自然現象、人身解剖、動物」に順序を変えれば相当する。（若干疑義を記すが、内部之図【図２】と照らし合わせると第十三室は魚貝類であり、動線の上で手前になる第十室が哺乳動物類であるだけに誤記を疑う。）

その室の展示によって観る者に学ばせようとする、理解の一助と種板は位置づけられる。とはいえ、室ごとの収蔵品説明に「映畫」の記載はない。いわば補助具としてそこに在ったのだ。例えば、第四室○星學器械之部には米国製の望遠鏡と、望遠鏡で観察した月の表面を現した米国製の月球が挙げられている。実際訪れた者は、さらにこの場で色彩鮮やかな種板展示を見たのだ。天体の形状・配置、蝕などを種板が図示したのである。第六室「比較解剖模型の傍」にあった「生理学」種板も、「地質學模型類の傍」にある種板も、動物類の種板も、同様の効果を補助具として産みだしたことだろう。

このような全体方針のもとで幻灯機自体が展示されたのが第一室であっただけに、来客を歓迎すべく「映畫」もまた効果的に並べ

三

たはずだ。引用冒頭傍線部「欧州各国の教舎等」は、どこに展示されたか記していない。それだけに、第一室に展示されたと考える。

内容については、手島精一本人が、フィラデルフィア博覧会（一八七六）のための渡米とその後の欧州行の記録を、おそらくは自前の種板で見せたようなのだ。一八八四（明治一七）年三月一三日に文部省内で教育における幻灯利用がプロモーションされた。[7] その際に六演目中の第三「教育等に關スル建物ノ部」説明者として手島精一の名が挙がっている。上記引用冒頭傍線部「欧州各国の教舎等」とは、この「教育等に關スル建物ノ部」に相当すると考える。

さらに云えば、教育錦絵「学校技芸寿語禄」（筑波大学附属図書館所蔵、製作年不明）の幻灯【図3】が映すのは欧米の「教舎」と見る。

そして後には複数の幻灯業者によるカタログが、題目と枚数が「其外」四種に一致する種板を掲載している。とはいえ、題目にも並びにもズレもあり、継承は単線ではなかったと考えてみよう。手島は、文部省勤務・教育博物館館長・博覧会関連の重鎮・工業教育の推進者であり、幻灯文化に寄与するところ大きかったにしろ、初期輸入に関わった複数経路のうちの著名な一人であったかもしれない。

種板の現存例を調査したのは次の四ヶ所である。1．京都大学総合博物館　2．大阪市立愛珠幼稚園　3．早稲田大学坪内博士記念演劇博物館　4．唐澤博物館。

3．についてはすでに二〇一五年に展示もあり書物にまとめられた。[8] 4．唐澤博物館については二〇一九年一〇月第一回調査において、2．大阪市立愛珠幼稚園所蔵品と重なりも多い美品が確認された。さらに精査する予定であったが、コロナ禍の緊急事態宣言などの影響で延期となっている。JCII日本カメラ博物館中島待乳関連資料中一一枚の種板も、同様の事情で未見のままである。いずれも調査を経て報告したい。

したがって本稿では1．京都大学総合博物館、2．大阪市立愛珠幼稚園での調査をもとに考察する。

特に、2．大阪市立愛珠幼稚園所蔵品については、石井研堂が手島由来とする四種「天文、自然現象、人身解剖、動物」のうち、「人身解剖」、「動物」のほぼ全ての種板には文字情報が墨書されている。この点から2．大阪市立愛珠幼稚園を基準とし、他の例を照らし合わせる基準とする。【別表一】比較対象として用いた幻灯業者の販売用カタログについては、都楽広告ならびに入手可能な中で最も古い吉澤カタログ（吉澤商店『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』明治三十八年十二月改正　第十五版、ゆまに書房復刻版を以下このように記す）に言及している。

1．京都大学総合博物館（調査日二〇二一年七月二八日）

「学術標本の名称　幻灯器のスライド（3000560、明治一九年）二〇点」は教育目的の幻灯講義用種板であり、内訳は「天文」と「人

体」である。ガラス製種板は木枠がつき、繰り返しの使用に耐えるようになっている。「天文」では二枚の種板が一つの木枠に収められていたり、"slipper"（滑らすタイプ）の仕掛けを仕組んだものもあり、枚数の数え方に差異がでるが、木枠の数は「天文」九枚「人体」四枚の計一三枚である。幻灯上映にあたっての説明など文字情報は残っていない。

いずれも愛珠幼稚園所蔵種板と重なるので、愛珠幼稚園所蔵品の文字情報から補うことができる。

興味深いのは、吉澤カタログの「廻轉器付」天文種板の一枚である。英語では"rack slide"と呼ぶタイプでハンドルを回すと種板が回転する。京都大学総合博物館蔵品【図４】には大陸・大洋の名称が漢字で書き込まれており、日本で製作したと考えられる。また、愛珠幼稚園蔵【図５】は色分けなどに模倣性があるが、書き込み文字はない。漢字情報を提供する必要はない、と考えられたのかもしれない。

２．大阪市立愛珠幼稚園（調査日二〇一九年二月二五日、六月一八日）

以下は、「幻燈明治二十年六月」（一八八七）の箱書がある幻灯機と種板[9]を大阪市立愛珠幼稚園で調査した報告である[10]。

商都大阪の中心に北船場町会の肝煎りで、愛珠幼稚園は一八八〇（明治一三）年に開かれた。幼稚園創設は日本で四番目、木造校舎が最古の園舎として今も残る[11]。

まず幻灯機については【図６】金属に漆であろう塗装を施した日本製、池田都楽幻燈舗製に倣う手作り品とみなされる。光源は石油ランプで、煙・熱を逃す煙突が立派である。ネジなど各種部品にも、作成者の技術力の高さがうかがえる。外国由来の教育品について、国内での模倣・複製化が奨励されたなか、これは一つの到達例とみなされよう。

この幻灯機は、英国で上映者が依頼を受けて現場に持ち運ぶ出張用の"showman's lantern"「興行幻灯機」を思い起こさせる。大きな会場に据えつける重厚な幻灯機ではなく、また、家庭で楽しむ"toy lantern"「おもちゃ幻灯機」でもない。これは都楽製造の幻灯機の模倣であろうが、都楽は英国W.C.Hughesの"Metamorphoser"タイプを模倣した、という系譜になる[12]。

種板については、愛珠幼稚園所蔵品の大半は市販品を模倣して描いたものだろう。一部オリジナルに作成したと推察するが、原作が見つかっていないだけかもしれない。人体・動物については４．唐澤博物館に収蔵されている種板が原作市販品であろうと考えられる。また、自然現象「十 龍騰水」の原作市販品は３．早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に鶴淵幻燈舗製品の収蔵記録がある[13]。広く一般に流布したものの複製品が愛珠幼稚園に収蔵されたと考える。

模倣は手島精一が推進したことで、その成果の幻灯機・種板がともに保存されている点で、大阪市立愛珠幼稚園所蔵品は貴重である。

以下に特徴をまとめる。英語の"slide title"にあたる種板の題名が記されている吉澤カタログを第一の比較対象とし、各項目丸括弧

内枚数は吉澤カタログのものだが、これは石井研堂が手島由来とした幻灯枚数と一致している。

①天文（一七枚）愛珠一七枚。木枠に番号・タイトル・説明書きのあるものが二枚ある。文字情報のないものが一六枚。判然としない一枚を除くと天文一七枚所蔵と数えられる。

またガラス種板二枚が仕組まれた木枠が三枚あり、細工種板への試みもうかがえる。吉澤カタログでは、「廻轉器付」では値段がほぼ倍額になる。

墨書を頼りに同定を試みる。吉澤「第一〇　彗星ノ軌道」が愛珠「第拾五太陽系中彗星軌道」にあたるのだろう。「…地球ヨリ観望スルノ特二固…大小の見ルノ図」と説明もある。吉澤「第一一　大熊　ウルサマショール」は、愛珠「第拾七」にあたり、説明「星学者ノ天体ヲ測量スルニ其標準トセル星ハ大熊ノ形状ノコトク排列スルヲ以て…名アルヲ示ス」と墨書されている。

吉澤カタログとの関連性は他の種板に関しても推察されうるが、図の提示が前提であるだけに紙幅の都合もあり、ここでは以上の示唆にとどめる。

②自然現象（一二枚）愛珠四枚。　うち三枚は吉澤カタログに一致する。三珊瑚礁、一〇龍騰、一三依蘭（アイルランド）ノ爆発泉である。一三に関しては、「アイスランドの間欠泉」ゲイシールを指しているが、吉澤カタログの誤記と同調しているかのように、愛珠幼稚園蔵種板も誤記である。番号のない一枚にはタイトル「日輪ノ重出」とあり、説明文もついている。それが、三原親輔『幻燈應用自然現象説明書』（明治二二）一八八九、第一「日輪ノ重出」の説明の引き写しである。[14] 本書には「十二氷國（アイスランド）ノ爆發泉」とあり、アイルランドの誤記はない。愛珠幼稚園蔵自然現象種板に関しては、付番も含めて単一系統ではないようだ。これより早い出版物もあったかもしれない。ここで参考にした『幻燈應用自然現象説明書』の出版は、幻灯機箱書きの二年後である。

また、一式は市販品でないだけに幼稚園が購入したとは考えにくく、幼稚園への寄贈と推察する。

③人身解剖（二〇枚）愛珠一九枚。　吉澤カタログの「第二（人體ノ骸骨）同背面」と「第三　脊梁骨等」が愛珠幼稚園には欠けている。ところが、吉澤にはない「三髑髏アタマノホ子」があり、総計は一九枚である。これについては、二で詳述するマカリスター"A Brief Essay on Anatomy"の小林義直譯[15]中に「二　人の頭骨」とあり、相当する。愛珠幼稚園所蔵品はマカリスター系であろう。

④動物（二一枚）愛珠二一枚。　吉澤カタログと照合すると番号がずれているが相当する。吉澤カタログの動物二〇枚は誤記であり、実質通し番号では二一枚である。【図7】

愛珠幼稚園の番号のない一枚はカンガルー有袋類を描いており、幼稚園の通し番号では欠番の九番にあたると仮定し、吉澤の三番袋鼠に相当すると整理すれば、合致する。

種板の比較検討の今後の注目点として気づいた二点を挙げておく。一【図8】愛珠幼稚園蔵五熊類は、松の木を描いている。松は

この作成者の創案だろうか。二【図9】愛珠幼稚園蔵一五舴は鹿の仲間を描きながら、トナカイを走らせるサンタらしき遠景が描かれる。理科教材にファンタジーが混じるわけだが、この点はこの作成者の創案なのだろうか。以上二点は唐澤博物館所蔵品と照合予定である。

二〈教育幻燈会以前の幻燈講義〉

「教育幻燈会」の始まりを新聞から探ると、『読売新聞』紙上では浅草井生村楼での「日本教育幻燈会」広告（一八八五年二月三日朝刊）を皮切りに、「帝国教育幻燈会」「衛生講談幻燈会」「改良幻燈会」と名称も様々に運営されたことがわかる。「教育幻燈会」の例としては一九〇八年三月三〇日を最後の例とする。この間、特に日清戦争・日露戦争や磐梯山噴火・三陸津波などの自然災害を見せた幻灯会も多く目を引いた。

また、『朝日新聞』紙上でも大阪の「教育幻燈会」一八八六年四月一五日を初めに記事にしている。一八八七年一月一四日朝刊によると、川上音二郎を客員に野崎詮が講師を務める「大演説会」は「英国發明機械幻燈」を「ゲリーイ運轉士」が見せると記している。機械のみならず種板も英国製ではなかったかと推察するが、不詳である。

以上のように、盛んな「教育幻燈会」であるが、明治一八年以降のことである。手島が日本に幻灯機一式を持ち込んだとされる時期からほぼ一〇年は、どのようにあったか。

この時期に残された①『幻燈写影講義』②『幻燈用解体図略説』③報告「幻燈試用」「幻燈略記」の三文献から想像すると、英語で云う"lantern lecture"「幻燈講義」が目指されていたことがわかる。

①『幻燈写影講義』（一八八〇明治一三年一月）[16]は、現時点で辿りつける最も古い文献である。"lantern lecture"「幻灯講義」を『幻燈写影講義』と和訳したと考えるが『うつしえのはなし』とルビがふられている。「写影」＝「写し絵」文化のもとで、新しい「幻燈」に遭遇し、娯楽であったはずの「写し絵」ゆえに「講義」に結びつかずに「はなし」と受けとめた、と読み解く。過渡性をよく現わす始まりの一冊である。

後藤牧太が作者として挙がるが、後藤の「講述」"lecture"を萱生奉三が編輯した、と記されている。二頁にわたる短い序文「小引」を記したのも萱生である。萱生は土居光華とともに伯克爾（バックル）『英國文明史』翻訳を前年一八七九年に出版しており、英語・英国文化通であった。

後藤は、当時は慶応、のちに高等師範学校で教鞭をとり英国に留学するが[17]、科学教育の方法を学び、また「手工」科目教授法の研

究・実践に努めた教育者であった。『幻燈写影講義』は、書名のとおり幻灯を教育に使う「講義」録として残った。

「講義」形式で「潮汐の満干の理由」「龍巻」「噴火山」「地震」「太陰」の五つの現象が理科的に説明されるが、幻灯を補助教材として「はなし」された記録である。これはまさに英国流幻灯講義"lantern lecture"を日本で試みた証である。

しかし、それだけではないだろう。種板で見せたはずの図版が印刷されているので、これを参考に種板を複製・自作し、この講述を手引きに説明することを促したと考えられる。

萱生奉三は「小引」で「舌切雀桃太郎の顛末」を理解するのと同様に「潮汐の干満月球の状況」を理解する方便として幻灯がある、と記している。そして、「余頃者庶民夜学校乃為」とあるように当時、夜学での教育目的に幻灯が使われていたと分る。

手島精一が岩倉具視使節団と米国から英国への視察にともなったのは一八七二（明治五）年のことで、特筆すべきことは、ロンドンでの外交・政治だけではなく、産業革命を牽引した北の都市を巡回し多くの工業施設を見学したことである。[18]

英国では産業革命にともない、労働者（萱生が庶民と記すところと重なる）が成人であっても、また職場での便益のためにも、更なる教育の充実がはかられた。昼に働く者が夜に学んだのだ。一八五一年国勢調査では、英国とウェールズで一、五四五校で約四万人が学んでいると数えられた。[19] 夜の学習に幻灯機は有効なツールである。産業革命を先んじて進めた英国では技術者の層も厚く活力もあった。後藤がその後理科教育を学ぶために留学したのは大学であるが、英国の工業を支える教育事情は背景としてあった。

②『幻燈用解体図略説』文部省編輯局、（一八八一明治一四年）[20]は、米国マカリスター社（McAllister）"A Brief Essay on Anatomy"を医学博士小林義直が翻訳し、①の翌年に出版された。『幻燈用…略説』が"lantern lecture"にあたり、その種板が示すコンテンツが『解体図』である。石井研堂の語彙では「人身解剖」、都楽カタログでは「人身生理解剖之部」、吉澤カタログでは「生理学之部」、次の③では「人體構造概要ノ部」と言葉は違うが、人体を説明するために分けて種板に図示したのだろう。とはいえその精度から、医学教育向けではなく、初等・中等理科教育用と考えられる。

巻末に幻灯機使用法を記しているが、マカリスター社を踏襲せず、「東京教育博物館ニ蔵スル所ノ幻燈に就き」記した、とある。学ぶ対象は身近の実物とする合理的な戦略は、幻灯を実際に用いる意欲の現われと見る。

紹介される種板も、断り書きもないことから幻灯機にならい東京教育博物館所蔵と考える。ところがその種板は、手島が持ち帰ったと石井研堂が記す「人身解剖二〇枚」ではなく、二一枚である。

吉澤カタログの「生理学之部」二〇枚とも、数の上で合わない。照合していくと、マカリスターにある「二一　人の頭骨」が吉澤カタログにはなく、一枚少ない理由となる。しかし、この「二一　人の頭骨」種板を大阪愛珠幼稚園・唐澤博物館では見ることができる。他の種板とも照合後、大阪愛珠幼稚園をマカリスター系と仮定できる（先述通り唐澤博物館収蔵品は再調査後報告予定）。

『幻燈用解体図略説』出版に二ヶ月ほど先立つ七月に、手島精一が東京教育博物館館長に就任したが、館長補として勤務し始めたのは四年前一九七七明治一〇年に遡る。かねてより理科・工学教育において先進欧米の教育品を活用すべしとの主張から、『幻燈用解体図略説』出版にも関わっていると考えるほうが自然である。とすると、石井研堂記述が正しければ、手島おひざ元には手島が持ち帰ったもの以外のマカリスター社製幻灯種板も収蔵され、伝播され複製されるべく書籍となった、と考えられる。

③報告「幻燈試用」「幻燈略記」一八八四明治一七年三月一三日文部省「修文舘樓上」で「我邦製造の幻燈を試用して理學上諸般の景像を映出し内外の嘉賓を延招して之を觀覧に供した」報告[21]。幻燈を教育に用いるプロモーション記録だが、当夜の次第と講演内容は、手島精一が書き残し、盛会であったことを伝えている。使用した種板は「我邦製造」とあり、日本がその時点で到達した技術力を示している。

「学術ノ講義等ニ使用スル」と「講義」の語を用いて言及する幻灯講義"lantern lecture"の歴史を、手島は「二、三十年」と紹介し、それより前から「狂畫ヲ映出シテ夜間ノ娯楽ニ供シ或ハ怪物ヲ映現シテ怪談ヲナス等ニ過キサリシ」と娯楽幻燈を分け、別枠のものとして紹介している。日本の概観ならば、手島が幻灯機と種板を持ち込んだとされる頃を起点としても「十年ほど」と計算されるので、この時、手島が念頭におき概観したのは、日本ではなく欧米である。英国の幻灯史とすると、端的なまとめになっている。

当夜披露した幻灯を教育幻灯とは手島は呼んでいない。プログラムは一と二で幻灯の略記を述べ、第三から第六まで種板＝映畫を実際に四演目見せる趣向であった。第三「教育等ニ関する建物ノ部」は、手島が欧米視察時の写真を幻灯種板にしたものを自ら説明したようだ[22]。その後、第四化石・骨標本などの「地質上變化ノ部」一二枚、第五「人體構造概要ノ部」二二枚、第六天象ノ部二二枚と続いた。【別表一】

この会合自体が手島の主導でありながら、演目第四、第五、第六を構成する種板は、石井記述によるところの手島持ち込み種板「天文十七枚、自然現象十二枚、人身解剖二十枚、動物二十一枚」と枚数もカテゴリーも異なっている。「我邦製造」の過程で異同が生じたのか、そもそも石井研堂の記述に誤解があったのか、あるいは別の種板を輸入し「我邦製造」したのか。いずれにせよ、おそらくはこの時点において既に多種多様な複製品が日本で提供されていたと考えられる。

この記事末尾では、「蔭繪」から始めて都楽の写し絵までの日本のスクリーン・プラクティスを紹介している。その結果、目下試みつつある教育における幻灯利用を、日本のスクリーン・プラクティスの連続性の中に捉えることになった。上映の目的は教育と強調してはいるが、とはいっても、やはりそれはスクリーン・プラクティスの大きな流れの中の一つとの真っ当な認識に基づいていた。

三〈石井研堂にとっての新式幻燈〉

明治日本は、教育目的を強調してはいたが、娯楽用の幻灯も入れたのだ。それを石井研堂自身は「新幻灯」「新式幻灯」と呼び、創刊から七年（一八八九－一八九五）主筆を務め人気雑誌に育てた少年雑誌『小國民』で紹介した。対立する旧幻灯、旧式幻灯は、写し絵とその器具である風呂を念頭においているだろう。

石井研堂が『小國民』誌上で「教育幻燈会」の連載を始める（四年一六号一八九二）[23]一年も前から、幻燈会の参観を誘ったり（三年三号一八九一）、幻燈器の仕組を説明したり（三年八号一八九一）と、幻灯流行の一八九〇年代を反映し、まずは「新」「新式」幻灯を紹介していたのだ。

「新式幻燈画」として煤をつけた種板に針で絵を描く「煙画」法を説明し、「だるまさんの豆腐買い」話を掲載している（三年一七号一八九一、一四－五頁）。手近さと滑稽で読者に訴えたのだ。

「新幻燈」「新式幻燈」として紹介される最後は「新幻燈　髭男鼠呑み込み」（六年一九号一八九四）であった。【図10】

英国起源の種板の中で最もポピュラーと云える細工種板で[24]、ハンドルを回す、あるいは細工用ガラスを引くと、髭もじゃ男が大鼾をかいて口を大きく開けたところに鼠が飛び込んで行く。【図11】今も人気で上映会の定番である。手作りも含め多くの種板が流布しており、稚拙なものもあるし、操演者による巧拙も出る一枚である。

当然、日本でも人気を博したのだろう。同時期の都楽カタログ（一八九五年）【図1参照】に掲載される「鼠喰　壹枚」もこの種板だろう。『小國民』記載からおよそ十年後の第一五版吉澤カタログ（一九〇五明治三八年）にも掲載されている（一七頁、復刻版p.45）。「◉鼠ヲ喰フ人　是ハ西洋人カ眠リナガラ鼠ヲ幾疋トナク口ニ入レル面白キ運轉畫ナリ」。細工種板を「運轉畫」と呼んでいることがわかる。

この人気種板を研堂は「新式」として記述した。教育幻灯には入れられないからだろうか。カタログ説明にもあるように「西洋人」が登場する娯楽幻灯であり、日本の従来の「うつしえ」とは異なるので「新式」なのだ。

石井研堂は、日本に続いてきたスクリーン・プラクティスも視野に入れていた。影絵（四年一九号一八九二）や「怪しき紋　ポンチ影絵」（六年三号一八九四）がその証拠である。それゆえに「新幻燈　髭男鼠呑み込み」を「新式」として紹介できたのだろう。

四〈石井研堂にとっての教育幻燈会〉

二の冒頭でふれたが、『読売新聞』紙上の浅草井生村楼での「日本教育幻燈会」広告（一八八五年二月三日朝刊）が、今日遡れる「教育幻燈会」の最初の記述である。二月二日―六日まで午後六時開場、入場料金四錢小児弐銭五厘（四頁）で「幼童婦女」にまず修身学経済学歴史等を説き聞かせ、「天文より衛生動植物等の事ハ幻燈」（二頁）を用いて丁寧に説くと宣伝している。講義と幻灯講義を併用したようだ。

その後「教育幻燈会」が各所・各地でしばしば開催され、衛生に関する啓蒙を目的とする例が多い。三カ月後には、巷で評判の幻灯を自分も観て納得した旨の神田須太郎の投書が『読売新聞』紙上に掲載された（一八八五年五月一六日朝刊三頁）。神田が観た幻灯は、天体、潮の干満、館山守司による「胎児生育の働き」で、「妊婦の腹〻割て初月より臨月まで〻目撃」するようとのことだ。その他「病源」や「動物」を「幻写」したという。

館山守司については、すでに前年一八八四年五月に一〇日間、胎児が生育するさまを「西洋写絵」で見せて好評を博したと『読売新聞』紙上（五月一一日）にある。

「西洋写絵」とは、西洋由来である幻灯機を用いる写し絵との認識が館山守司にあったにせよ、そもそもはエンターテインメントとして見せている認識であっただろう。

しかし同じ演目は、「教育幻燈」のもとでも興行可能であったのだ。館山守司においては「西洋写絵」と「教育幻燈」の互換性は明らかだし、巷の「教育幻燈」の隆盛にこの類の興行意識は根にあったと考える。産婦人科の啓蒙教育のための幻灯であっただろうし、幻灯を用いた講義であっただろう。女性客も誘い多く集まったらしい。だがエロ・グロに通じる怖いもの見たさの人寄せ効果もあったと推察する。

ところが、対象を少年におく「教育幻燈会」となると、様相が変わる。

石井研堂は『小國民』では「教育幻燈会」と題し計一〇三映[25]を挙げ、【別表二】いわば誌上「教育幻燈会」を開催した。その「教育幻燈会」は幻灯講義とは異なっていくのである。

まず、その連載形態は規則性・統一性・安定性に欠ける。掲載号によって扱う枚数も異なり、一映だけ掲載の時もあり、七映に及ぶこともあり、また掲載の無い号もあった。

コンテンツは、毎号多彩多様、云い方を換えれば雑多で統一性に欠ける。例えば、奇数号は理科、偶数号は社会、というような大枠もない。

また、最終的な「教育幻燈会」閉会の辞もなかった。日清戦争の時節柄介入を受け『小國民』の「小」が不適切とみなされ終刊し（七年一八号一八九五）、少年の少の字を採り『少國民』と誌名を替えることになった。その後さらに三号を刊行して後、石井研堂は編集部から去った。遡るほぼ一年間は「教育幻燈会」も下火で、三映（七年六号一八九五）を例外として、「教育幻燈会」はなかった。

このようなある意味での自由さは、編集上も修正された様子はない。それは、総目次から明らかだ。五年目後半期から過去半期分の総目次が掲載されるようになった。誌面の構造・構想が総目次から明確になるか、といえばそうでもない。そもそも「教育幻燈会」は分類項目となっておらず、◎遊戯に一括で入っている。種板題目が番号順に記されているわけでもない。「教育幻燈会」の各題目については、総目次からは不明である。

さらに、六年後半期総目次では、教育幻燈は◎遊戯に入っていない。題目によってさまざまな分類にふりわけられているものもある（全部ではないことも悩ましい）。例えば、79「西野文太郎の墓石」は◎博物に、80「虫の巣と蝶」は◎動物に、85「李鴻章」と86「大院君」は◎伝記に分類されている。分類としては、これで間違いではない。だが、記事を毎号追いかけて来た読者は「教育幻燈会」の範疇のもとにこれらに出会っていたはずで、この目次は後には役に立たない。

また逆に、◎動物の他項目、例えば「カメレオン」が「教育幻燈会」に入っていても、違和感はなかっただろう。『小國民』の記事はいずれが「教育幻燈会」にあっても、また、いずれも「教育幻燈会」に入ってなくても記事として成立し読むことができる。

石井研堂は『小國民』誌面全体を「教育幻燈会」として構想できた、と云える。なんであれ図示し言葉で説明することで、少年を教育することが編集方針であったと考える。

例えば「教育幻燈会四映」はファンタスマゴリアの原理の説明である。光学装置が生み出す娯楽を科学的に説明することを「教育」とした体裁である。とはいえ、欧米で喝采を浴び大人気であったファンタスマゴリアを日本にとっての「新幻灯」「新式幻灯」として紹介していても、『小國民』においては、それも間違いではない。「教育幻燈会」記事と、その他の記事とは基本的に交換可能であったとみなしうる。

『小國民』誌の記事は、「題目・図版・説明」という構成を主流とし、白黒で印刷された頁を繰っていく限り、「教育幻燈会」記事も他の紙面も差がない。ただ、さすがに「幻燈会」では、説明が丁寧な「語り」口調になり、他の記事よりも口語的で優しい印象を与える配慮を見受けられる。とはいえ、そのように語りかける必要のある「題目」を選んで「教育幻燈会」にまわしたとも考えにくい。

雑誌を構成する記事のうち、いずれを「教育幻燈会」のもとに置くか、という判断の基準が実に見えにくい。石井研堂が「教育幻燈会」を創り出したわけではないだけに、これはひとり石井研堂の問題ではなく、当時の人が「教育幻燈会」に何を期待したかを汲

まねばならない。

五〈教育幻燈会と幻燈講義――その相違点〉

ここで、入手できるなかでは古く、また、『小國民』と同時期の加藤勢喜『少年必携教育幻燈会』（一八九〇明治二三年[26]）を手掛かりに、「教育幻燈会」とはどのようなものと構成されたかを追ってみる。本書が与える印象は、石井研堂の「教育幻燈会」と似ている。この一冊は、見開き頁に収まる二一枚の絵と説明から成っている。その一枚一枚は多岐にわたり相互に関連性はなく、むしろとりとめない。起承転結のある物語としてこの「教育幻燈会」があったのではなく、一枚一枚が見世物＝スペクタルのごとく観衆を魅了することを目指している。

冒頭自序には目的を次のように記している。

> 如何に貴き勧善懲悪の教育ばなしでありましても若し面白くなくて聴人がなければ亦致し方のないことであります是に放（おい　ママ）て今私は幻燈の写絵を以てお子供衆を楽しませつつ知らず識らずの間に教育いたしませうと考え出でました
> （一頁）（傍線は執筆者）

すなわち「教育」と銘打ちながら「楽しませ」るツールとして「幻燈の写絵」があり、「教育」は「知らず識らずの間に」達成する、と極めて楽観的である。

なにしろ新渡来の幻灯機はそこにあるだけで、装置として非日常へ誘う。ともる灯りと石油ランプから漂う臭いと煙は、期待と気分を盛り上げたことだろう。

幻灯を教育に用いる場合の英語は"lantern lecture"幻灯講義であるが、英文書物を検分すると【図12】、構成が定型である。すなわち種板セットのタイトルのもとに種板一枚ずつの説明が通し番号で記される。番号に沿って展開を追うと、このセットの理解が見込めるのだ。

日本にも、このような"lantern lecture"幻灯講義に相応する「教育」幻灯もたしかにあった。例えば、偉人の一生を辿る、歴史的事件を描く、が講義される場合である。【図１参照】

英国では例えば『少年必携教育幻燈会』が呈示するような、幻灯会が開かれていたとは考えにくい。日曜学校や禁酒会館での子

ども向け幻灯会は、趣旨に沿った教育効果のある演目を通し狂言のごとく見せ、合間や本題の後にコミックな娯楽幻灯で座をなごませ、時には「鼠を喰らう髭男」で場内を沸かせ、最後はクロマトロープで華やかに閉会するものだ。観客は、またの機会を楽しみに散会し、また再会する。

娯楽の質と関連するのか、精査の必要はあるが、英国では次世代の娯楽の代表となった映画が初期から寄席を公開の場としたのに対して、寄席プログラムを見ても幻灯は寄席を興行の場としたのか見えてこない。あくまでも教育臭がついてまわったのかもしれない。このあたりは調査・分析の必要性を考える。

幻灯講義には今一つ娯楽性が欠けていることをふまえて、日本で「教育幻燈会」を人気にさせたものを次に考察していく。

六〈大佛次郎時代小説の幻燈〉

時代小説全集に収録されたように、大佛次郎（一八九七―一九七三）本人が体験した幻燈会は一九〇〇年代以降であろうが、中編小説「幻燈」（一九四七―八）では、自分より一世代前の時代の幻灯上映会を描いている。

「幻燈」の「創作覚え書」によると、[27] 一八七〇―七二（明治三―五）年位の風俗をメモしているが、幻灯会については特に記述はない。

また小説のプロット上の役割としては、主人公助太郎がその後関わることになる娘と出逢う場として、この幻灯会はある。暗がりの中に浮かぶ淡い光が照らす賑わいの場と演出されている。

身分も「瓦解」した士族の惣領息子が、家の命運を背負い勉学に励むことを期待されている。帰路に横浜南京町の関帝廟辺りで賑わいにつられて横道に入り、幻灯会を覗く。そこで助太郎と友人は、幻灯を次のような順序で観ていく（一六九―一七四）。[28]

1．赤い西瓜、2．岩の上の燈台・遠景に青い海、3．太湖石・牡丹、4．黄色い水の上のジャンク船、5．異人館にアメリカ旗、6．自転車に乗っている女、7．人が乗っている風船、8．孔雀、9．煙を吐いて汽車が走っているところ、10．外国の立派な街、11．花火、藍色の空に黄や赤のいろいろの模様のフィナーレ。

大佛次郎が鮮やかに色彩を描写していることは、今更ながら新鮮で臨場感が湧く。幻灯に色はあったからだ。

ここに描かれる幻灯は、石井研堂が『小國民』で「教育幻燈」という括りで提示しようとした世界に近い。助太郎と友人は途中から入るので開幕が確認できないのは残念であるが、途中入場が認められる緩い運営であったことも興味深い。上映の場は、一時的にせよ、もっぱら幻灯を専門に見せるための空間だったように読める。英国でこれに相当する場は未見であるだけに、この〈場〉の在

り方も興味深い。

最後の「11．花火」は、幻燈種板の「花輪車」を複数見せたのだろうか。欧米ではクロマトロープにあたる細工種板は、上映者が腕をふるい観客が賛嘆を惜しまないお定まりのフィナーレである。とはいえ連載時の木村荘八による挿画[29]では打ち上げ花火の映写であるが。

それにしても1．―10．までの幻灯に脈絡がなく、場当たり的な印象を与える。複数の種板で一つの物語を語るのではない。観客にとっては未知の事物を一枚一枚見知っていく「教育」を狙っていると考えるべきなのだろう。大佛次郎が「幻燈」で描いたのは、そのような例であった。

主人公が後にこの時を思い出す際には、幻灯は「新しい」世界を想像させるものとしてある。自分が属し、そこから抜け出そうともがく、身の回りの瓦解した幕府・士族の世界ではない。例えば、福澤諭吉の画入り本「西洋事情」「学問のすゝめ」「世界国尽」「窮理図解」など、自分で買った本を列挙して述べている次のような一節が、主人公にとっての幻灯の位置づけなのだ。

> 本をひらいて癖のある匂いを嗅ぐだけで、助太郎は新しい世界の門口に立ったような気分になり得る。銅版の挿画で見る西洋人や、街の風景画は、いつか見た幻燈を思い出させるのだった。闇の中に、輪形に明るく、ぱっと色を浮き上らせては、次々に変化して行く、あの画のように不思議の世界に自分を導き、その上に自分の勝手な夢を描いて我を忘れていられるのだ。（三九四）

この引用の直後でも、「幻燈や、福澤先生の本の挿画で見る美しい世界」（三九六）と繰り返している。幻燈は助太郎に「不思議の世界」「美しい世界」を呈示したのだ。

ここに挙がった種板のうち、欧米の事物の紹介に相当するのは、実は少ない。明白なのは5．のアメリカくらいで、3．4．は異国とはいえ中国だろう。10．などは、場所を同定できないながら「立派」に見えたことが大事であろう。

石井研堂ならばこれは「新」幻灯とは呼ばず「教育幻燈」と呼ぶ。教育幻灯が見せる世界にふれた若者が「新世界」を感じたのが明治日本の幻灯界ということだろう。襲いかかる未知の世界のめくるめく欠片を受け止め、まだ見ぬ世界への憧憬をやしなう人たちが、かつて日本にいたのだ。

「創作覚え書」にも「あの時代のニュアンスを描くだけに頼っている」（三五）とあり、「（旧時代の）闇の勢力」を主人公の東京での生活の「光明」と対比し、「（若き者らの）希望を仄めかして筆を納めん」（三七）と終わる。

むすび

最後に考察したいのは、一九七〇年代末に東京藝術大学で教養科目の生物学を三木成夫から受けた、なかがわちひろの回顧である。この場合のスライドは、もちろん幻灯ではなく、またデジタル・アプリのパワーポイント・スライドでもなく、マウントしたフィルム・スライドであろう。

> 小劇場のような階段教室の照明を落として、先生は次々にスライドを映写する。ヤツメウナギ、縄文杉、小便小僧、しめ縄、胎児の顔、仏像、潮汐表にゴキブリの活動記録など、奇想天外な組み合わせに彫刻家や声楽家の卵たちは笑いころげた。枯淡な味わいの落語家さながらに座をもりあげて聴く者の頭とこころを揺さぶりながら、三木先生は三十億年の生命記憶について語るのだ。
>
> 例えば、らせん。…[30]

「奇想天外な組み合わせ」のスライドが繰り広げられても、大学の教養科目の生物学という枠組みの中である。一見ばらばらなだけに、石井研堂から大佛次郎の流れの教育幻灯会のようにも見えるかもしれない。だが、「三木先生は三十億年の生命記憶について語る」とメッセージを受け止めた時に、幻灯講義"lantern lecture"として成立している。だからこそ記憶に残り、それを再現できている。とすればまさにスライドを用いた教育が実を結んでいる。時代はこの方向に進んできたようである。

本稿エピグラフは一つの理念であろうが、今に至るまで開けたのは「スライド」もあって面白い場であったようだ。

謝辞　本稿に関連する現物調査にあたり多大なるご尽力を賜りました方々の名をここに記して謝意を表します。大阪市立愛珠幼稚園井谷正美園長はじめ先生方、愛珠会、大森くみこ活動写真弁士、太田米男京都映画芸術文化研究所所長、池田光恵錦影絵池田組代表、塩瀬隆之京都大学総合博物館准教授、唐澤るり子唐澤博物館館長。酒井敏中京大学文学部教授には明治の文献読解においてご教示いただきましたことを感謝いたします。

註

（1）幻燈流入の典拠とする石井研堂『明治事物起原』は初版一九〇八年以降の増補・改訂・復刻について検討が必要であろう。（佐藤洋一「石井研堂著『改訂増補　明治事物起原』と同書復刻版の利用上の留意点」『福島県立博物館紀要』第9号一九九五、一―五四。）手島の帰国についても、日本評論社版（一九六九）では明治六年（一八七三）米国からとなっており、また春陽堂版底本のちくま文庫版では明治七年（一八七四）の英国からの帰国時とされている。

（2）石井研堂『理科十二ケ月』博文館、（明治三四）一九〇一。

（3）土井進『唐澤富太郎と教育博物館の研究　実物教育による〝もの〟と〝こころ〟の探求』ジダイ社、二〇二〇、一二頁。

（4）遠藤みゆき「中島待乳と幻燈」『東京都写真美術館紀要』（一五）、二〇一六、七二頁。

（5）池田都楽『仏教教育幻燈映画説明書　釈尊御一代記』（明治二八）一八九五、巻末一―三頁。

（6）教育博物館『教育博物館案内』（明治一四）一八八一、（頁数なし）。

（7）大日本教育會『大日本教育會雑誌』第六號、（明治一七）一八八四。復刻、宣文堂書店出版部、一九六八―九、第六號、四九―五四頁。

（8）早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『幻燈スライドの博物誌――プロジェクション・メディアの考古学』青弓社、二〇一五。

（9）大阪市教育委員会『大阪市立校園所蔵品目録』（平成元）一九八九、四五頁。

（10）過程でデジタル保存も完了し、上映可能な状況が整ったので二度の試演を経て創立一四〇周年記念（二〇二〇年六月一日）に園児・来賓を迎え、活動写真弁士つきで上映した。この経緯・成果については別稿で報告。

（11）藤森照信『建築探偵雨天決行』朝日文庫、一九九七、（四二）―四九。

（12）太田米男京都映画芸術文化研究所所長の見解。

（13）『幻燈スライドの博物誌』八九頁、分類番号 41501-433。

（14）三原親輔『幻燈應用自然現象説明書』進成堂、（明治二二）一八八九、一頁。

（15）McAllister, "A Brief Essay on Anatomy." 小林義直譯『幻燈用解体図略説』文部省編輯局、（明治一四）一八八一。

（16）後藤牧太・萱生奉三『幻燈写影講義』聚星館、（明治一三）一八八〇、（頁数なし）。

（17）加藤詔士「後藤牧太の英国留学」『英学史研究』二〇一一年、第四四号、一―二五頁。

（18）田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』岩波書店、二〇〇二、三三四―五。松村昌家『幕末維新使節団のイギリス往還記』柏書房、二〇〇八、「後編　岩倉使節団のイギリス回覧」に詳しい。

（19）Sally Mitchell, "Adult Education," Alan Rauch, "Technical Education," in Sally Mitchell ed., *Victorian Britain: An Encyclopedia* (New York: Garland Publishing, 1988), p.240, pp.247-8.

（20）『幻燈用解体図略説』（15）参照。

（21）『大日本教育會雑誌』第六號、四九―五四頁。

(22) これを「トラヴェローグ」と呼ぶのは大久保遼『映像のアルケオロジー』青弓社、二〇一五、一〇二頁。幻灯をテーマで分ける際の英語でのカテゴリーで「旅行記録」を意味する。

(23) 『小國民』巻号記載方法については、本来の編集方法にのっとり、出版開始からの年数と号数を記し、補足として西暦年を丸括弧内に記す。

(24) C. Constant, "Man Swallowing Rats," 1888. に始まる。*Encyclopaedia of the Magic Lantern, London: The Magic Lantern Society, 2001, pp. 75-76.*

(25) この数え方は五枚目を五映目としてからで、四枚目までは一夜から四夜と数えられていた。

(26) 加藤勢喜『少年必携教育幻燈会』弘文館、(明治二三) 一八九〇。

(27) 大佛次郎「幻燈」(一九四七—八)からの引用は『ちくま日本文学全集38』一九九二、頁数を丸括弧内に記した。

(28) 大佛次郎「創作覚え書　幻燈」『大佛次郎随筆全集第三巻』、朝日新聞社、一九七四年、二九—三七。

(29) 木村荘八による挿画つき大佛次郎『幻燈』未知谷、二〇〇九年、カバー。

(30) なかがわちひろ「なつかしい一冊——三木成夫『内臓とこころ』」『毎日新聞』朝刊、二〇二一年七月二四日、九面。

参考文献

年号については記載を丸括弧内に記し、西暦を記している。

池池田都楽『仏教教育幻燈映画説明書　釈尊御一代記』(明治二八) 一八九五。

石井研堂『明治事物起原』(一九〇八)、一九六九、一九九七。

——『理科十二ヶ月』博文館、(明治三四) 一九〇一。

岩本憲児『幻燈の世紀』森話社、二〇〇二。

遠藤みゆき「中島待乳と幻燈」『東京都写真美術館紀要』(一五)、二〇一六、七一—九一、一〇—一四。

大久保遼『映像のアルケオロジー』青弓社、二〇一五。

大阪市教育委員会『大阪市立校園所蔵品目録』(平成元) 一九八九、四五頁。

岡野英太郎『教育幻燈会』、近園書店、(明治三〇) 一八九七。

大佛次郎　村上光彦編　木村荘八挿絵『幻燈』未知谷、二〇〇九。

——『ちくま日本文学全集38』一九九二。

——「創作覚え書　幻燈」『大佛次郎随筆全集第三巻』朝日新聞社、一九七四、二九—三七。

加藤詔士「後藤牧太の英国留学」『英学史研究』二〇一一、第44号、一—二五。

教育博物館『教育博物館案内』(明治一四) 一八八一。

後藤牧太述・萱生奉三編『幻燈写影講義』聚星館、(明治一三) 一八八〇。

小林義直譯『幻燈用解体図略説』文部省編輯局、（明治一四）一八八一。
柵山人『日清戦争幻燈会』藍外堂、（明治二七）一八九四。
佐藤洋一「石井研堂著『改訂増補　明治事物起原』と同書復刻版の利用上の留意点」『福島県立博物館紀要』第９号一九九五、一―五四。
『小國民』一八八九―九五。復刻、不二出版、一九九八―九。
『「小国民」解説・解題・総目次・索引』不二出版、一九九九年。
『少年必携教育幻燈会』（明治二三）一八九〇。
大日本教育會『大日本教育會雑誌』第六號、（明治一七）一八八四年。復刻、宣文堂書店出版部、一九六八―九。
田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』岩波書店、二〇〇二、三二三―八。
土井進『唐澤富太郎と教育博物館の研究　実物教育による〝もの〟と〝こころ〟の探求』ジダイ社、二〇二〇。
なかがわちひろ「なつかしい一冊――三木成夫『内臓とこころ』」『毎日新聞』朝刊、二〇二一年七月二四日、九面。
藤森照信『建築探偵雨天決行』朝日文庫、一九九七。
松村昌家『幕末維新使節団のイギリス往還記』柏書房、二〇〇八。
三原親輔『幻燈應用自然現象説明書』進成堂、（明治二二）一八八九。
山下恒夫『石井研堂』リブロポート、一九八六。
吉澤商店『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』（明治三十八年十二月改正　第十五版）。復刻版牧野守編『明治期映像文献資料古典集成２』ゆまに書房、二〇〇六。
鷲田清一「折々のことば」『朝日新聞』二〇二一年七月三一日、一面。
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『幻燈スライドの博物誌――プロジェクション・メディアの考古学』青弓社、二〇一五。

Mitchell, Sally. Ed. *Victorian Britain: An Encyclopedia.* New York: Garland Publishing, 1988.
Scrimgeour, C.W. *Lantern Lectures Without the Slides.* Dundee: James P. Mathew & Co., 1907.
Encyclopaedia of the Magic Lantern, London: The Magic Lantern Society, 2001.
Mason,s Series of Lectures for the Lantern: Historical Collection from the British Library. London: British Library, 2011.

『毎日新聞』
『聞蔵ビジュアル』
『ヨミダス歴史館』

【別表一】

明治6, 明治7	明治13		③明治17	明治19	**明治20**	明治22	明治28	明治38
1873, 1874	① 1880		1884 大日本教育会雑誌 6 号	1886	**1887 幻灯機箱書　種板不明**	1889	1895	1905
石井ノ手島	幻燈寫影講義		文部省 1884 年 3 月 13 日記録	京都大学総合博物館	**大阪市立愛珠幼稚園**	幻燈應用自然現象説明書	都楽　広告	第 15 版吉澤＊
	全 5 講義		第 3　教育等…建物ノ部枚数記載なし	文字情報なし		（愛珠適合分のみ記す）	細目なし	
天文 17 枚			第 6　天象ノ部　22 枚	（天文）全 9 木枠	**（天文）**		天文學の部	天文 17 枚
			10　彗星		**15　太陽系中彗星軌道**		17 枚	10　彗星ノ軌道
			他　省略		**17　星・・・大熊ノ形状**			11　大熊
				【図 13】地球図	**〇文字記載なし（地球図）右と照合**			
	潮汐			他 8 木枠	**他文字記載なし分照合せず**			
	太陰（つき）							
自然現象 12 枚			第 4　地質上變化ノ部　12 枚		**（自然現象）**		天變地異	自然之現象 12 枚 愛珠に相当分以下
	龍卷		該当せず		**10 龍騰水 Cf. 鶴淵製 濱博 41501 － 433**	13 龍騰水	自然現象	龍騰水ノ圖
					3 珊瑚礁	7 珊瑚礁	12 枚	珊瑚島ノ圖
					13 依蘭（アイルランド）ノ爆発泉	12 氷國（アイスランド）ノ爆發泉		アイルランド爆發泉ノ圖
					無番　日輪ノ重出	1 日輪ノ重出		
	噴火山				**他文字記載なし分照合せず**			
	地震	明治 14						
		② 1881						
		幻燈用解体図略説						
		小林義直譯	第 5　人體構造概要ノ部　22 枚					
人身解剖 20 枚		マカリスター 20 枚	説明者大澤謙二	（人身解剖）全 4 木枠	**（人身解剖）19 枚**		人身生理	生理学之部 20 枚
		人體ノ骸骨	人體骨格	○	**1　人体骨格**		解剖之圖	人體ノ骸骨
		人ノ頭骨	顱頭				20 枚	同背面
		脊梁骨等	脊椎縦斷					脊梁骨等
		齒牙	齒及ヒ其造搆		**4　歯牙並組織**			齒牙
		前面ノ筋肉	全身諸筋ノ前面		**？（胃と擬人化消化）**			胃肝臓及膵
		後面ノ筋肉	同後面		**？10**			循環
		頭頸及顔面ノ筋肉	頭頸及ヒ顔面ノ諸筋		**17　皮膚及ヒ其組織**			皮膚
		胸腸及ヒ腹	消食器ノ排置		**13　胸管**			胸骨
		消化器	大腸及ヒ小腸		**19　前面ノ筋肉**			前面ノ筋肉
		胃肝臓及ヒ膵	胃肝膵		**12　後面ノ筋肉**			後面ノ筋肉
		胸管	胸管		**18　頭頸及ヒ顔面ノ筋肉**			頭頸及顔面ノ筋肉
		心臓及ヒ肺臓	心臓及肺臓		**6　脊髄神経**			脊髄神經ノ全景
		循環	肺ノ血行		**12　心臓及ひ肺臓**			心臓及肺臓

		皮膚	皮膚及ヒ其組織		**腦及ヒ脊髄**			腦及脊髄
		腦及ヒ脊髄	神經ノ全形	○	**胸廓及ヒ腹**			胸脇及腹
		脊髄神經ノ全景	腦及ヒ脊髄		**9　消食器ノ排置**			消化器
		第五對腦經	大腦縦斷		**15　眼球図解**			眼球
		顔面神經	小腦及ヒ延髄		**第五対脳経**			第五對神經
		眼球	第五對神經		**顔面神経**			顔面神經
		耳	顔面神經	○	**16　耳**			耳
			21 眼球圖解	○	**3　髑髏**			
			22 眼筋					
動物 21 枚					**9 番欠　番号欠が 9 番相当**		動物學之部	哺乳動物之部　21 枚 （20 枚と誤記）
					1 四手類一		21 枚	猩々、黒猩、猿猴
					2 四手類二			**彌猴、狐猿、猿**
					番号無し、9 番相当			袋鼠
					10 齧歯類十			栗鼠、野兎、海狸、 モヽンガ
					3 翅手類三			大蝙蝠、猫、猴
					6 鼬鼠類六			鼬、鼠、貂鼠、水獺
					11 貧歯類十一			鴨嘴獸、食蟻、犰部 首猯猯条龍鯉樹獺
					8 虎豹類八			獅、虎
					7 犬狗類七			犬、狼、狐、狸
					4 蟲類四			厳鼠、猬
					5 熊類五			熊、羆
					21 馬二十一			馬
					12 象類十二			象
					14 駱駝類十四			駱駝
					15 觧　類十五			鹿、馴鹿
					16 洞角類十六			麒麟
					13 厚皮類十三			野猪、獏
					18 海豹類　十八			膃肭獸、海象、海豹
					19 海豚類十九			海豚、一角
					17 牛類十七			牛
					20 鯨類廿			鯨

太字大阪市立愛珠幼稚園分を種板と文字情報兼備ゆえ基準とする。

吉澤＊は吉澤商店『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』明治三十八年十二月改正　第十五版、ゆまに書房復刻版 2006.

【別表二】
『小國民』（1889-1895）の教育幻燈会とその他のスクリーン・プラクティス

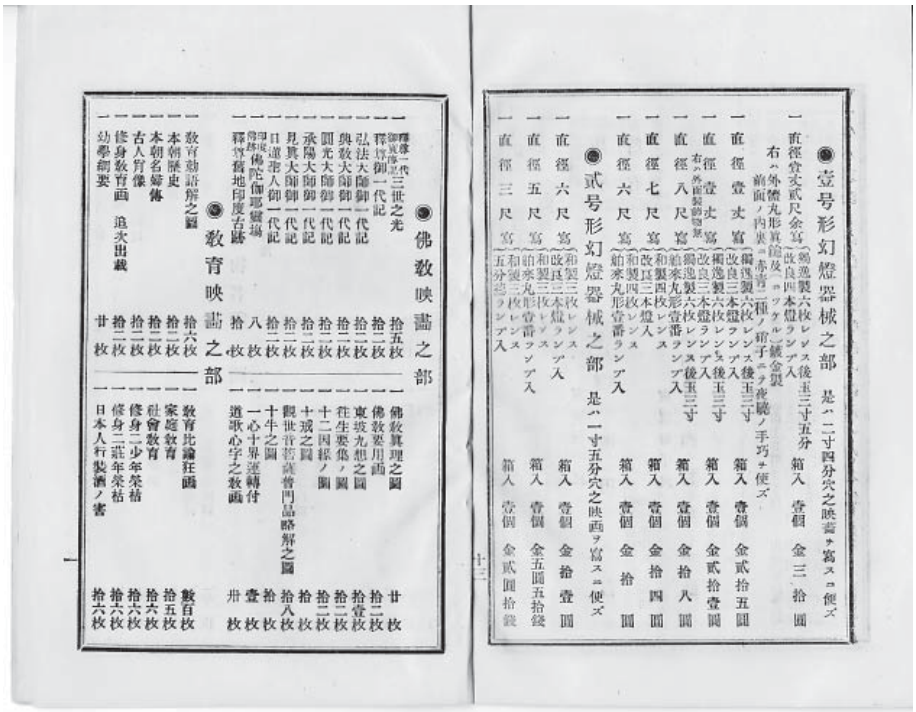
年目・号 西暦	番号は教育幻燈会　他は頁数と概要を各号末に記載	
3・3　1891	p.30	幻灯参観誘う
3・8	pp.14-16	幻燈会・仕組・雷神例
3・9	pp.15-16	幻燈会続き、滑稽
3・10	pp.6-7	ばけもの　三種紹介
3・17	pp.14-15	新式幻灯画　煙画　だるまさんの豆腐買い Cf. 4・17
4・13　1892	p.11	活人画
4・16	記載無（1）夜	p22-3　教育幻燈会紹介　初出
4・17	2 夜	コロンブス
	pp.8-9	透明ガラス着色面と黒面に縫い針　Cf. 3・17
4・18	3 夜	コロンブス
	4 夜	幽霊を現す法
4・19	以下映 5	萬代橋
	6	表紙　四角囲み部分
	7	てこ
	8	てこ
	9	グラッドストン
	pp.34-35	影絵
4・20	10	シカゴ
	11	シカゴの公園
	12	視覚玩具
	13	フレデリック大王
4・21		
4・22	14	20 号表紙　米議事堂
	15	前回表紙　天神橋
	16	泉岳寺
	17	いたずら
4・23	18	滝野川紅葉
	19	つる掛岩
	20	ひも結び
	21	ペルシア回教堂
	22	表紙　ペルシア茶店
4・24	23	日光
	24	神田明神
	25	フィリップ・シドニー
	26	ペルシア農夫
5・1　1893	27	支那人
	28	正月
	29	H.D. ウィンブレドン
5・2	30	ペーター・ガッセンヂ—
	31	ドイツうつし絵
	32	大工
5・3		
5・4	33	表紙　嵐山
	34	蜃気楼
	35	水上蜃気楼
	36	衣服
	37	第一国立銀行
	38	高塔
	39	ヴェネツィア貴族　絵が 2 枚
5・5	40	櫻
	41	表紙　桜田門
	42	シカゴ玉乗り
5・6	43	レオナード徳行　4 枚
	pp.36-38	幻影
5・7	44	表紙舟橋

	45	ポンペイ
	46	支那ちょうちんまつり
5・8	47	表紙　鹿児島城
	48	NY
5・9	49	グレース・ダーリング
	50	上野公園
	51	オペラ座
	52	ニコライ堂
5・10		
5・11	53	大村益次郎
	54	表紙　古銭
	55	モスクワ
5・12		
5・13		
5・14		
5・15	56	妙義山　前号表紙（ママ　実際は前々号）
	57	支那人読書
	58	ブリストルのアメリア　4 枚
5・16		
5・17	59	羽黒山
	60	表紙　西郷の墓
	61	四條河原
5・18	62	善光寺　表紙
	63	駅鈴
5・19	64	石山寺
	65	鹿島要石
5・20		
5・21	66	博覧会のカリフォルニア館
	67	アイダホ館
	68	表紙　倉宗吾神社
	69	石巻港
	p.7	撮影速寫圖　マイブリッジ
5・22	70	近江地図
	71	耳塚
5・23		
5・24		
6・1 ＊ 1894	表紙	幻灯　懸賞当選　5 年 23 号発表小画師筆
6・2 ＊	72	天橋立
	73	支那人舟家
6・3 ＊	p.35	怪しき紋
6・4 ＊		
6・5 ＊		
6・6 ＊		
6・7 ＊		
6・8 ＊	74	支那人馬車
	75	ワシントン生地
	76	楊柳の花
6・9 ＊		
6・10		
6・11	77	英国古城門
	78	生田萬
6・12		
6・13	79	西野文太郎墓
	80	虫の巣と蝶
6・14		
6・15	81	表紙　大鳥圭介先生
	82	高橋お傳
	83	支那上海

6・16	84	革命ハワイ
6・17	85	李鴻章
	86	大院君
	87	支那少女
	88	表紙　支那の少婦
6・18		
6・19	pp.28-31	新幻灯　髭男鼠呑み込み
6・20	89	樺山資紀
	90	野津道貫　平壌戦
	91	蹴鞠　牙山（アサン市）
	92	弾丸硝薬
	93	一里塚
	94	槓杆遊戯
	95	表紙　支那の発明
6・21		
6・22		
6・23	96	表紙　清　将校
	97	支那兵士
	98	天津
	99	白河（ペーほー）
	100	溺死清兵
6・24		
7・1　1895		
2		
3		
4	p. 50	投書　幻燈会報告。
5		
7・6	101	浅川大尉　7・1へ
	102	榕樹　インドの木
	103	水戸公園　表紙
7・7	p.14	パノラマ
8		以下なし
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
少國民 1		
2		
3		

＊6・1～6・9は表紙に
幻燈投影に興じる子どもたち

【図 13】表紙が幻燈上映会の体裁
6 年 4 号 1894。



【図 1】販売種板表 1

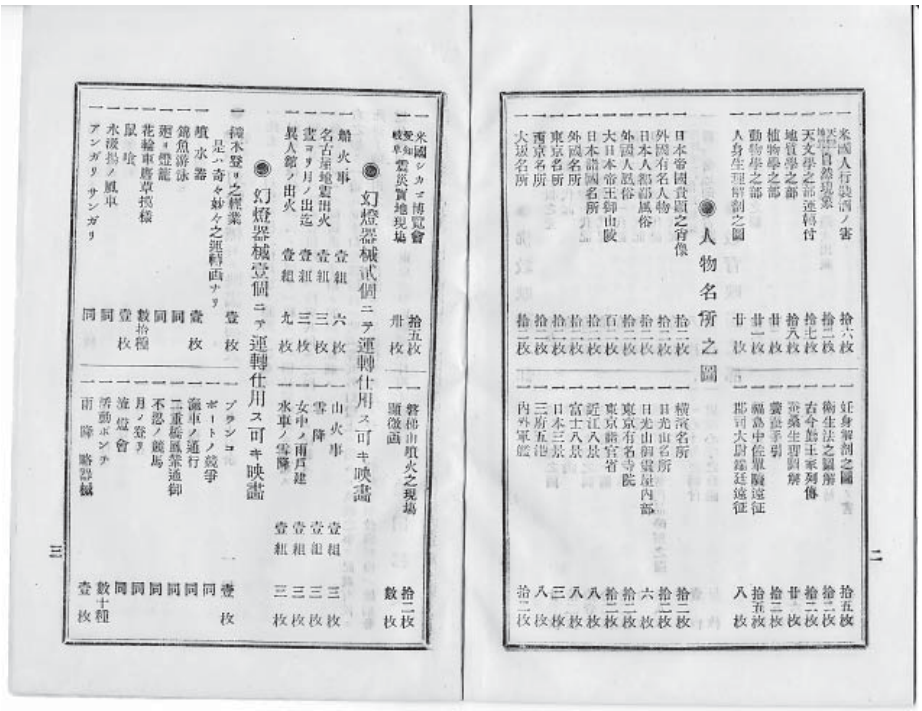
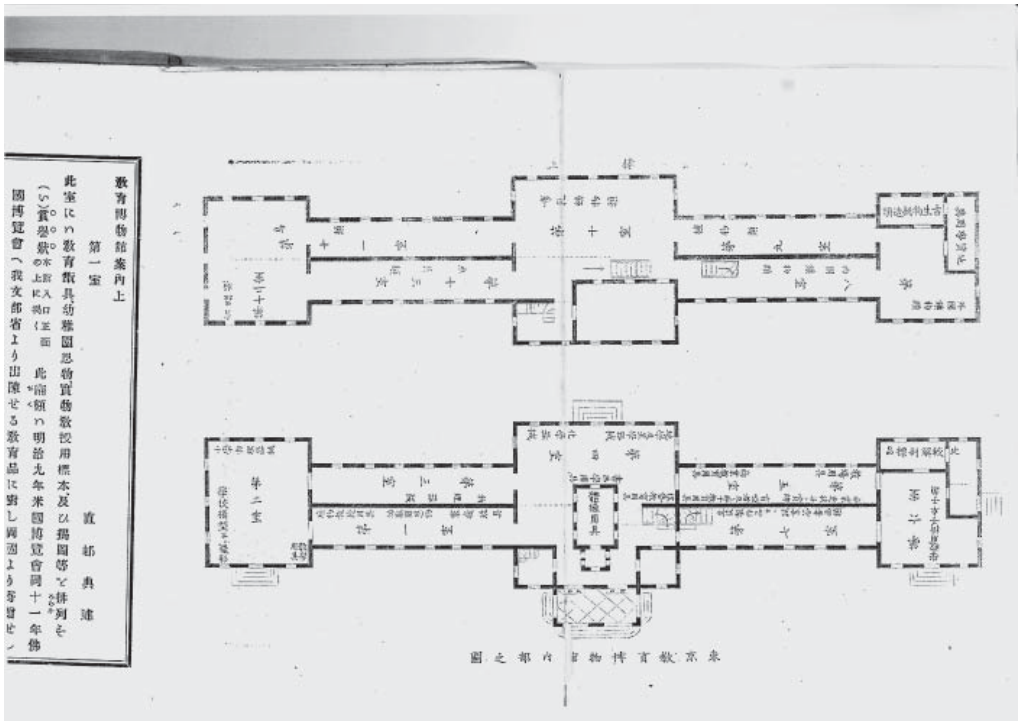
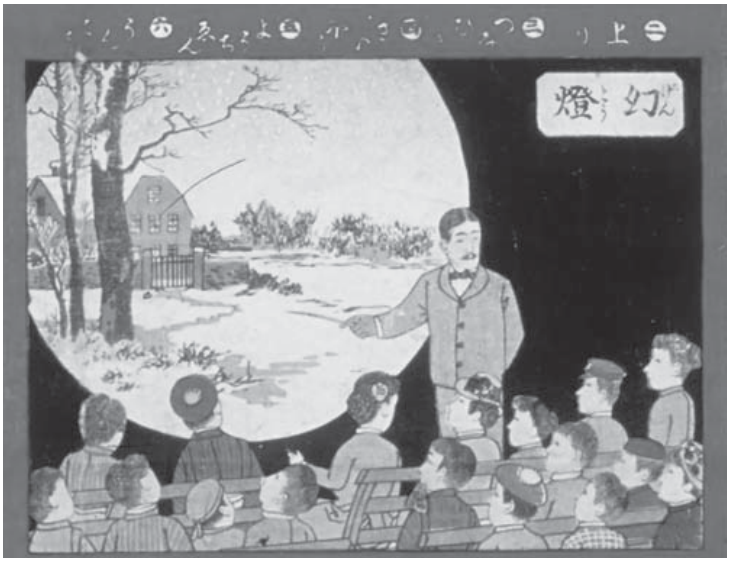


表 2

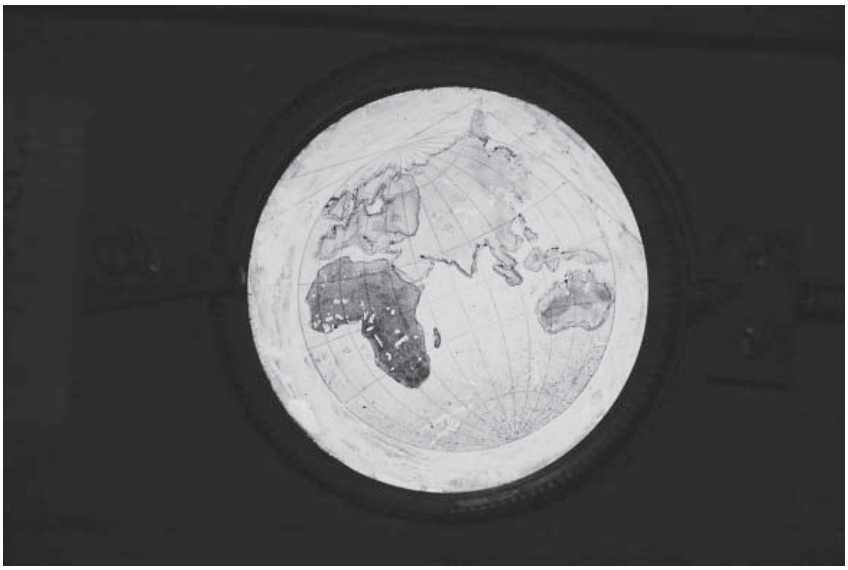


【図 2】教育博物館内部之図

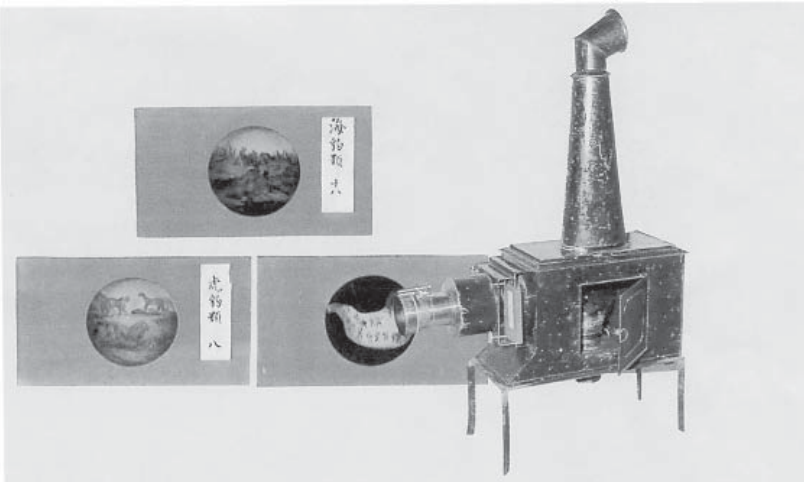


【図 3】幻燈場面　筑波学校技芸すごろく　より

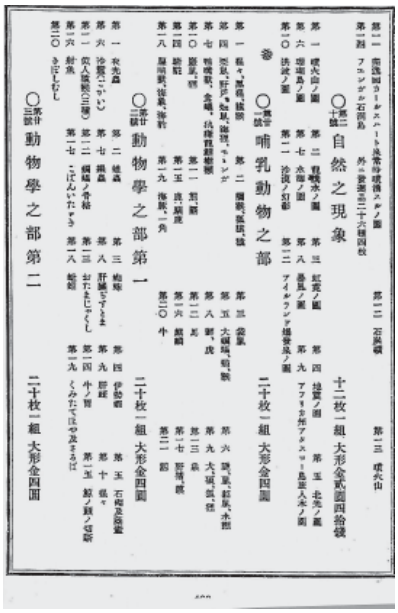
【図 4】日本語情報書き込み　京都大学総合博物館蔵



【図 5】日本語情報はないが　愛珠幼稚園蔵



【図 6】大阪市立校園所蔵品目録より



第一二　石鼎嶺

第一三　噴火山

十二枚一組　大形金貳圓四拾錢

第四　接觸ノ圖　第五　北海ノ氣

第六　珊瑚島ノ圖　第七　水陸ノ圖　第八　墨瓦ノ圖　第九　アフリカ州アダスマー島土人生ノ圖

第一〇　洪水ノ圖　第一一　沙漠ノ幻影　第一二　アイダクシア種食瓦ノ圖

○第二十一　自然之現象

第一　噴火山ノ圖　第二　瀑布ノ圖　第三　紅霞ノ圖

第四　蛇蝎ノ圖　第五　北海ノ氣

第六　珊瑚島ノ圖　第七　水陸ノ圖　第八　墨瓦ノ圖　第九　アフリカ州アダスマー島土人生ノ圖

第一〇　洪水ノ圖　第一一　沙漠ノ幻影　第一二　アイダクシア種食瓦ノ圖

二十枚一組　大形金四圓

第一　獅子、猛獸、猿類　第二　鹿、羚羊、駱駝、猿

第三　袋鼠

第四　犀、猪、豚、鼠、蝙蝠、蝙蝠、蝙蝠

第五　犬、狐、狼、狸、狸、狸

第六　鼬、貂、鼬、鼬、木貂

第七　野牛、金羊、山羊、羊、羊、羊

第八　鹿、羊、羊

第九　大猩猩、猩

第一〇　鼠、鼠、鼠、鼠

第一一　鼠、鼠、鼠

第一二　象

第一三　鼠、鼠、鼠

第一四　鼠、鼠、鼠

第一五　鼠、鼠、鼠

第一六　鼠、鼠

第一七　鼠、鼠、鼠

第一八　鼠、鼠、鼠、鼠、鼠

第一九　豚、鼠、角

第二〇　牛

○第二十二　哺乳動物之部

巻

二十枚一組　大形金四圓

第一　獅子、猛獸、猿類

第二　鹿、羚羊、駱駝、猿

第三　袋鼠

第四　犀、猪、豚、鼠、蝙蝠、蝙蝠、蝙蝠

第五　犬、狐、狼、狸、狸、狸

第六　鼬、貂、鼬、鼬、木貂

第七　野牛、金羊、山羊、羊、羊、羊

第八　鹿、羊、羊

第九　大猩猩、猩

第一〇　鼠、鼠、鼠、鼠

第一一　鼠、鼠、鼠

第一二　象

第一三　鼠、鼠、鼠

第一四　鼠、鼠、鼠

第一五　鼠、鼠、鼠

第一六　鼠、鼠

第一七　鼠、鼠、鼠

第一八　鼠、鼠、鼠、鼠、鼠

第一九　豚、鼠、角

第二〇　牛

○第二十三　動物學之部第一

二十枚一組　大形金四圓

第一　獅子　第二　猛獸　第三　鵜鳥　第四　伊勢海老　第五　石榴及蘇鐵

第六　冷蔵ニテ　第七　鶴鳥　第八　肝臓ニテすとるま　第九　鯨鯉　第十　鶴ヶ

第一一　炭人（蜘蛛三種）　第一二　鶴鳥ノ骨格　第一三　おたまじゃくし　第一四　牛ノ胃　第一五　鯨ノ頭ノ切斷

第一六　針魚　第一七　こはんいたるう　第一八　鯨鯉　第一九　くみたてほやあるべ

○第二十四　動物學之部第二

二十枚一組　大形金四圓

【図 7】吉澤カタログより

【図 8】松の木に注目　愛珠幼稚園蔵

【図 9】遠景トナカイに注目　愛珠幼稚園蔵

(29)　新幻燈　十九號

讀者先づ此の幻燈會の圖を一見すべし。是れ一種の奇病に罹り、活きたる鼠を食ふ男なり、看よ彼れ口を開き鼠の走りて其の口中に入るを。彼れは幾匹食ふも尚ほ饗かざるなり。

偖て此の如く畫の動くものを製せんと欲すれば、別に構造の異なる幻燈を要す。即ち畫を挿入るゝ透鏡筒二箇を燈壁に附けたるもの是れなり。(尋常の幻燈には一箇なり)右の圖を見ても略解し得らるべし。而して一方の筒中に挿入する硝子箋には、動かざる畫を描き、他の一方の筒中には、動くべき畫を挿入し、二種の畫影を合して一となし映發しむるなり。即ち此の鼠食子に在りては、甲に人物を畫き、乙に鼠を描き、別に之を動かしむるの工夫を施すなり。機械の作用を以て映畫を回轉せしめ、看る人の眼をして誤視しむるものなり。

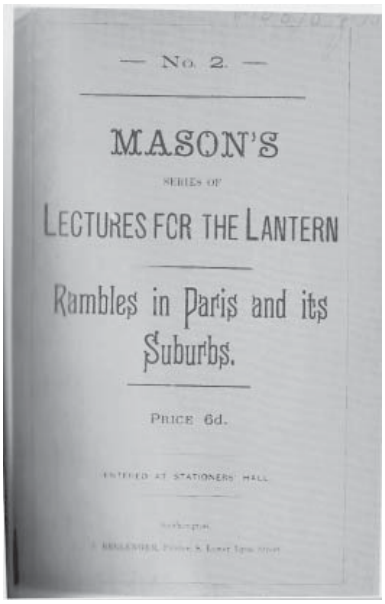
此の機械は如何に組立たるかと云ふに、左に示せる

【図 10】新幻燈　髭男鼠呑み込み　『小國民』 6 年 19 号 1894。

【図 11】例 1　*Encyclopaedia of the Magic Lantern,* p.75.

例 2　*Encyclopaedia of the Magic Lantern,* p.76.

例 3　左半月形の開きに覗くガラスを上下することで髭男の口が開閉し、今は布団上の鼠が右ハンドルを回すと円を描くように動き、髭男に呑み込まれても、また寝台下から現れ…。
岩田託子蔵



— No. 2. —

MASON'S

SERIES OF

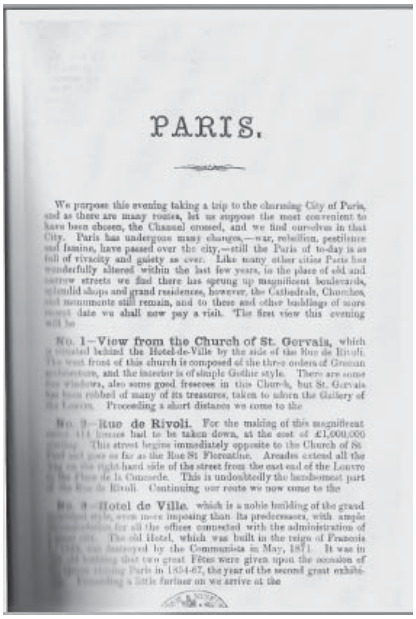
LECTURES FOR THE LANTERN

Rambles in Paris and its Suburbs.

PRICE 6d.

ENTERED AT STATIONERS' HALL

【図 12】表紙



PARIS.

We purpose this evening taking a trip to the charming City of Paris, and as there are many routes, let us suppose the most convenient to have been chosen, the Channel crossed, and we find ourselves in that City. Paris has undergone many changes,—war, rebellion, pestilence and famine, have passed over the city,—still the Paris of to-day is as full of vivacity and gaiety as ever. Like many other cities Paris has wonderfully altered within the last few years, in the place of old and narrow streets we find there has sprung up magnificent boulevards, splendid shops and grand residences, however, the Cathedrals, Churches, and monuments still remain, and to these and other buildings of more recent date we shall now pay a visit. The first view this evening will be

No. 1—**View from the Church of St. Gervais,** which is situated behind the Hotel-de-Ville by the side of the Rue de Rivoli. The west front of this church is composed of the three orders of Grecian architecture, and the interior is of simple Gothic style. There are some fine windows, also some good frescoes in this Church, but St. Gervais has been robbed of many of its treasures, taken to adorn the Gallery of the Louvre. Proceeding a short distance we come to the

No. 2—**Rue de Rivoli.** For the making of this magnificent street 414 houses had to be taken down, at the cost of £1,000,000 sterling. This street begins immediately opposite to the Church of St. Paul and goes so far as the Rue St. Florentine. Arcades extend all the way on the right hand side of the street from the east end of the Louvre to the Place de la Concorde. This is undoubtedly the handsomest part of the Rue de Rivoli. Continuing our route we now come to the

No. 3—**Hotel de Ville,** which is a noble building of the grand renaissance style, even more imposing than its predecessors, with ample accommodation for all the offices connected with the administration of the City. The old Hotel, which was built in the reign of Francois I., was destroyed by the Communists in May, 1871. It was in this building that two great Fêtes were given upon the occasion of the Exposition Universelle Paris in 1854-67, the year of the second great exhibition. Proceeding a little further on we arrive at the

【図 12】種板題目と説明が並ぶ